
ソックス街道

たかぴょん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソックス街道

【Nコード】

N8519F

【作者名】

たかぴょん

【あらすじ】

靴下が持っている秘密をあなたに特別にお知らせしましょう。よろしく願います。ところでさっき、あなたが食べたごはんのおかずは何でしたか？まあ、どうでもよいことはさておき、どうぞじつくりお楽しみください。ちなみに評価をお待ちしております。

ソックスを履かずに畳を踏みしめる。

梁田は外反母趾である右足の土踏がなめるような不快感を覚える。裸足で室内を歩くということは、東洋人であることの確証だ。彼は高等学校の夏休みに奨学生として海を渡り、紅毛碧眼と一緒に生活したことがある。そんな環境でも、梁田は裸足で生活していた。彼らは梁田のその裸足に目を向け、空手の技を見せてくれと挨拶代わりに近寄って来たものだ。

空手を見せても良かったが、彼は本当を言うとは裸足を敬遠している。物心付いたころから、彼の深層心理に裸足は「貧しくて卑しい」と焼き付けられていた。ソックスを履いていた方がおしゃれであるし、裕福なイメージがある。

梁田の母里子は細腕一本で彼を育てた。甲府にある特急も通過するような無人駅の臨時雑用婦として働き、内臓も真っ黒にさせるような富士山からの反射日光を浴びて、その顔は浅黒かった。里子の収入はやっと二人が暮らして行けるぐらいだった。

田舎で長家生活をしていると不都合なことが多かった。父親も帰らないような長家の住人は、近所から出て行けと言われたこともある。だが梁田は留学先から貰ったきれいなイングラント生地で、足元を着飾ることを覚えた。それを履いていると気持ちちは踊るとでもいうのだろうか、わざと有頂天になって踊ってみた。よくフアッションは足元を見れば分かると言うが、大地に足が着くように落ち着くを感じた。格闘技もフットワークが大切で、特に空手は地面に足で握るように歩かなければ足を奪われてしまう。

梁田は学校からいじめられて帰って来るときも富士山が、彼の背中から隠れることは無かった。ソックスのような形をした角を曲がり、山道を登って行った。甲府もそうだが、山麓近くで生まれた民話には、山に鬼が住み番人となって登場するものが多い。「桃太郎」も鬼ヶ島の山に住む鬼退治に向かう。だが直接の住人から言わせてもらえば、眼が慣れてしまうので潜在意識でしか認識していないそうだ。狩りに向かうものは、眼の動きが逐一、生命に関わるかのように鋭敏になる。眼が生活に必要なものにしか活動しなくなる。

つまり足元と眼の感覚を鍛えれば、この貧困から這い上げられる人間になれる。

富士山が笑っていた。梁田は上京した街から、正月休みで帰って来た。わら半紙へ太い毛筆を奮わせるように、冷たい風が吹き荒れる。富士吉田町行きの乗合バスが何台も循環していた。大型スーパーや大木置き場以外は、民家が立ち並んでいる。その脇を単線の富士急行が走り抜ける。数年前と変わらない。

足元と眼を鍛えながら「ソックス山道」を登る。出世をして、またこの富士の山を眺めたいと思う。偉大で朗らかなものの下に支配されると落ち着く。

梁田の心は震えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8519f/>

ソックス街道

2010年11月3日13時55分発行